

氏名:	内田 恵
学位の種類:	博士(看護学)
学位記番号:	甲第418号
学位授与年月日:	令和3年6月23日
学位授与の要件:	学位規則第3条第3項該当
論文題目:	進行がん患者と看護師の対話をもつ意味に関する現象学的研究 Phenomenological Study focusing the meaning of dialogue between nurses and patients with advanced cancer.
論文審査委員:	主査 内布 敦子 教授 (兵庫県立大学) 副査 川崎 優子 教授 (兵庫県立大学) 副査 川田 美和 准教授 (兵庫県立大学) 副査 浜渦 辰二 (大阪大学名誉教授)

博士論文要旨

研究の背景と目的

進行する病気や死に関して患者と話すことは、医療者にとって大変難しいことである。特に終末期ケアに携わる看護師の多くが困難感やストレスを経験していることがわかっており、対応に苦慮するという状況が頻繁に起こっている。そのため、悪い知らせや死に直面している進行がん患者と看護師の対話の場面ではいったいどのようなことが起こっているのか、その問いに対するこたえを見出すために、対話の場面で進行がん患者と看護師の間に起こっている現象にアプローチし、その現象を理解することが必要であると考えた。そこで、進行がん患者と看護師の対話の場面における両者の経験をありのままに記述し、当事者の視点から対話の経験の意味を明らかにすることを本研究の目的とした。

研究方法

進行がん患者と看護師の対話の場面において起こっている現象をありのままに記述し、経験の意味を解釈する必要があるため、現象学的研究方法を用いることにした。現象学的分析方法の手順は、フッサール現象学の流れを汲む研究者の分析方法や理論的背景を参考にして独自のものを作成した。予備調査としてフィールドワークを実施し、データ収集と現象学的研究の実現可能性について確認した。インタビューガイドを用いて、進行がん患者と看護師が経験した対話の場面についてデータ収集を行い記述データとした。全ての記述、解釈において、常に当事者の視点に即しているのか問いながら、現象学的な態度に留意して分析を進めた。

看護師と患者の対話の経験について個別に分析を行った後、両者の対話の経験を統合させて分析を行った。看護師と患者が悪い知らせや死に関する話をしてい

る場面について、それぞれの体験世界を解釈して記述し、両者の間に何が起きているのか、どのような意味があるのかという視点で分析を行った。

研究を行うにあたり、兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所研究倫理委員会の承認を受けた上で実施した。

結果および考察

研究協力者は看護師5名、がん患者5名であった。5事例の対話の文脈は、その背景にある看護師の意図と、患者の価値観や病気体験の経過に影響されていた。文脈は個別的であったが、死に関する不安に焦点を当てて進めようとする対話、もしくは対話を進められない場合に起こる現象を捉えることができた。対話の場面における看護師と患者の対話の経験の意味について明らかになった点は以下のとおりである。

1. 死に関する話に限らず、看護師と患者はそれぞれの背景や置かれている状況によって個別の文脈が流れており、それぞれの文脈が交錯するなかで死に関する不安に焦点を当てて対話を進めようとしている。
2. 対話の前提として、死に直面している患者の不安な気持ちを知りたいという看護師の強い関心がある。
3. 看護師は常に死に関する話ができる状況かタイミングを計って対話を進めている。患者の不安が強い場合や患者のニーズが不明な場合は、病気や死に関連する周辺の話から話し、患者の反応をさぐって安全に話を進めている。
4. 死に関することについて話したいという患者のニーズや患者が話せる状況をつかんで踏み込むことが、対話を進めるための転換点になっている。
5. 看護師は患者の反応によって気持ちに踏み込まない判断をしているが、踏み込まないことは患者を守ると同時に看護師の安全を図る意味がある。
6. 看護師が患者の気持ちに踏み込まず、その場に踏みとどまることは、患者にとって看護師の心配や気遣いを感じるケアとしての意味をもつ。
7. 死に関する対話を促進する患者の話すカや、看護師がその力を信頼することは、よい相互関係のなかで話を進めるという実践のありかたを示唆する。
8. 患者にとっては死に関する考えや信念を言語化し、今後の療養生活について第三者と共有する意味があり、対話によって安心や安寧をもたらすケアの効果があつた。看護師にとっては、患者の状況や背景にある体験に共感し、深い患者理解に至るという意味があつた。
9. 看護師が示す関心や共感による相互理解を生じ、そのことが患者のもつ力を引き出すことにつながる。対話の経験を通して得られる他者理解は当事者のエンパワーメントにつながり、対話のケアとしての意味をもつ。
10. 本研究の結果は、看護師が対話の実践を振り返ったときに、話が聞けなかったという体験にも意味を見出し了解するなど、看護師の対話の経験の意味づけに貢献できるのではないかと考える。

Abstract

Background and objectives

It is very difficult for healthcare providers to talk with patients about progressive illness and death. In particular, many nurses involved in end-of-life care experience a sense of difficulty and stress, and there are frequent situations where they struggle to cope. Therefore, I would like to find an answer to the question of what exactly is happening in the dialogue between a nurse and an advanced cancer patient who is facing bad news and death. It is necessary to approach and understand the phenomena occurring in the dialogue situation between the advanced cancer patient and the nurse. Therefore, the purpose of this study is to describe both patients and nurses experiences as they are in a dialogue related to the ill progression and death, and to clarify the meaning of the dialogue experience from the perspective of both.

Method

Phenomenological research methods were used to describe the phenomena occurring in the interaction between advanced cancer patients and nurses as they are and to interpret the meaning of the experience. For the procedure of the phenomenological research method, I created an original method, referring to the analytical method and theoretical background of researchers who follow the stream of Husserl's phenomenology. Fieldwork was conducted as a preliminary study to confirm the feasibility of data collection and phenomenological approach. The interview guide was used to collect a data on the interactional dialogue experienced by advanced cancer patients and nurses. The analysis was done with a phenomenological attitude in mind in all descriptions and interpretations, always being careful to take the perspective of the participants involved. The dialogue experiences of nurses and patients were analyzed separately, and then the dialogue experiences of both were integrated and compared. From interpretation the nurses and patients experience of a scene in which they were talking about bad news and death, it is described what happened and what's of those meaning for both nurses and patients. The study was approved by the Research Ethics Committee of the University of Hyogo School of Nursing and the Institute for Community Care and Development.

Results & Consideration

The contexts of the five cases were influenced by the nurses' intentions behind them and the patients' values and the course of their illness experience.

Although the context was individual, it captured the phenomenon that occurs in dialogues that focus on anxiety about death and want to proceed or fail to proceed. The following points were clarified regarding the meaning of the nurse-patient dialogue experience in the dialogue situation.

1. Nurses and patients have individual contexts based on their backgrounds and situations, not just death-related discussions. In each of these intersecting contexts, the dialogue focuses on anxiety about death.
2. Nurse's strong interest in knowing the anxious feelings of patients facing death is the premise of dialogue.
3. Nurses are always looking for situations where they can talk about death, or when to talk about it, to promote dialogue. If the patient is anxious or their needs are unknown, nurses speak from other topics related to the illness or death, exploring the patient's reaction and safely proceeding with the dialogue.
4. The turning point for dialogue is to explore and step in the patient's need to talk about death and whether they can talk about it.
5. Nurses decide not to go into the feelings depending on the patient's reaction. The meaning of not stepping into the patient's feelings is to protect the safety of patients and nurses.
6. The nurse stays there without stepping into the patient's feelings, which means that the patient feels the care and concern of the nurse.
7. Dialogue is facilitated by the patient's ability to talk about death and the nurse's trust in that ability. The implication of the practice is that a good mutual relationship between patients and nurses will promote dialogue.
8. For the patients, it meant verbalizing their thoughts and beliefs about death and sharing their future life with someone, and the dialogue had the care effect of reassurance and peace of mind. For the nurse, it means being able to empathize with the patient's situation and background experiences, and to understand the patient deeply.
9. When nurses show interest and empathy, mutual understanding occurs, which in turn draws out the power of the patient. The experience of dialogue brings understanding of others, creates empowerment, and is meaningful as dialogue care.
10. The results of this study can contribute to the meaning-making of the dialogue experience, for example, when nurses look back on their dialogue practice, they find meaning and understanding in the experience of not being able to listen.

論文審査の結果の要旨

本研究は、研究者自身が、看護師として、死に関する対話を当事者である進行がん患者との間で行うことの難しさを実感したことが発端となって計画されたものである。実際に行われている対話をとらえてその意味を探究するための研究方法論を模索し、フッサール現象学を理論的背景とする研究手法が実現可能であるかを確認する予備調査の段階を経て、現象学の専門家からアドバイスを受けながら独自の方法を確立し、本研究の実施に至った。

進行がん患者が治療の限界に直面し、治療断念を迫られるタイミングで発生した看護師との対話を分析対象として、5人の看護師と5人の患者の1対1の対話について現象学的視点で解釈を行った。いずれも看護師は患者に強い関心があり、患者がどのような心情にあるかを理解したい思いで患者に慎重にアプローチしていたが、結果的に患者の死にまつわる思いを聞くに至ったケースは3例であった。2例においては、患者の様子を見はからい、死や病気の進行について患者がどう感じているかを聞くことを踏みとどまっていた。

看護師の文脈と患者の文脈はそれぞれで流れているが、看護師が知りたいことと患者が話したいことがタイミングよく呼応する現象、患者の様子をみて看護師が患者の心情を聞くことを踏みとどまる現象、踏みとどまりながらもそばにいる現象などをデータから読み取り、そのような現象の背景や意味を解釈することができた。死にまつわる話に至った場合も至らなかった場合も対話にはそれぞれの意味があり、その意味は患者にとっても看護師にとってもケア（安心や力を得ること）に繋がっていることを現象学的解釈によって見出した。

死に関する患者の思いが表現された事例では、死に対する考えや信念が言語化され、看護師が共感することで今後の療養生活の希望を第三者と共有できたという成果があり、患者に安心や安寧がもたらされた。看護師にとっても深い患者理解につながっていた。患者が死に関する思いを表現するに至らない場合でも、看護師が患者の気持ちに踏み込まないことや、不安な患者のそばに居続けることが、患者にとっては安全であったり、看護師の心配や気遣いを感じるといった点で意味があったことが読み取れた。

ターミナル期における医療者と患者との対話に関する研究は、ナラティブ研究をはじめとして散見されるが、ほとんどが医療者側か患者側のどちらか一方の体験をデータとしている。本研究のように実際に対話をした看護師と患者をペアとして、対話の実態をつかんだ研究はなく、データとしても貴重な研究である。

また内田氏は長年がん看護専門看護師としてがん患者が直面する厳しい局面で専門的な相談を行っており、例えば「死について話すことはしない」と決

めている事例において、内田氏によるインタビューの際には死に関する思いを口にするなど、優れたインタビュー技術によって貴重なデータを得たものと評価された。